

解答

一　問1　　1　イ　2　イ　3　ア　4　ア

問2　　1　最先端のテクノロジーは庶民のものになつたが、それは大量生産・大量消費には繋がらず、見世物や鯉や金魚の品種改良や浮世絵のように、エンターテインメントという精神欲を煽る方向に進んだ。

2　日本では、自然災害がたびたびあり、人間に強い影響力を持つ自然との決別はできなかつたので、自然を支配しようというイギリスとはまったく違つた、自然との一体感を持つ自然観があるから。

3　時間をかけて歩く旅が流行し、年寄りが生きがいを持つて働き、心豊かに生きるという人の生の本質が実現している。また、電気自動車が走り、電信柱や鉄塔も地下に埋められ、自然食中心となり、美しい自然の風景が回復して、低環境負担型社会となつていて。

二　問1　A　しょうじ　B　（親）不孝　C　声明　D　悲劇　E　気配

問2　少年たちがそれぞれの家庭で妹や祖母や母親を相手にして、平和で幸福に過ごしている様子を描き、その後の悲惨さを際立たせる効果と、さらに、原爆投下に向けての緊張感を高める効果。

問3　世界で初めての原爆投下によって、日本の一都市であった広島が、世界の歴史の中で知られる特別な存在になつたということ。

問4　ウ　これまで国や県のえらい人は、一億みな戦士となつてアメリカ軍をやつつけようと言つていたのに、

今度は一億みなおせじ屋になつてアメリカ人をもてなそうというのは、納得できないということ。

2　大きな声で強く主張する意見や、一見勇ましく見える主張に、人間は動かされやすいものだ。しかし、

そういう主張はともすれば簡単に変わってしまうもので、用心する必要がある。今回の戦争の悲劇も、そんな人間のあさはかさが招いた結果なのかもしれない。ただ、人間は、そういった現実すべてを受け入れて、前向きに生きていかなければならないし、少年たちにも困難を乗り越えて力強く生きぬいていってほしいということ。

解説

一　【I】の文章は、現在の「地球環境問題」を考え直す視点を提示するもので、「心豊かに生きながら」「人間活動の拡大を低環境負担型に変えていく」には、どうすればよいかを考えています。イギリス等欧米との比較をし、さらに、江戸時代の日本の姿も参考にしています。そして、【II】の文章は、理想が実現した場合の20年後の日本社会の様子です。

問1　「精神欲」と「物欲」という相対立する用語を入れる設問ですが、筆者の立場が前者には肯定的で、後者には否定的であることをおさえ、【1】と【2】は「うだけを煽る」に続いて否定的で、【3】と【4】は「うをも煽る」に統いて肯定的であるという文脈のつながりから判断します。

問2　1　本文のその前の部分では、テクノロジーをどう扱いどうなつたかという点を、産業革命時のイギリスと江戸時代の日本とを比較する形で論じています。つまり、一方のイギリスでは、テクノロジーの庶民化が大量生産・

大量消費に向かい、物欲だけを生み出したのに対し、江戸時代の日本では、エンターテインメントの方向に向かい（具体的には、見世物や鯉・金魚の品種改良や浮世絵）、精神欲を煽つたというのです。問われているのは、日本での産業革命の内容ですから、後者について説明するのですが、本文が二者を対比する形で論述されています

から、前者のイギリスの事情も挙げ、比較する形でまとめるべきでしょう。

2　1でまとめた、日本の産業革命の特殊性の原因を問っています。この設問は比較的簡単で、同じ段落の最初の文で「一方では消費へ、一方ではエンターテインメントへ向かうことになつたこの差はどこにあつたのでしょうか」と問いかけの形で問題提起し、すぐ後で「それは、自然観にあるようです」と答えていますから、この「自然観」のイギリスと日本との差異（傍線部の直前に説明されています）を説明すればよいということになります。

問3　【I】の文章と【II】の文章とのつながりを問い合わせ、【I】の考えが【II】でどう生かされているかを「具体的に」説明するというものです。あくせくしないで心豊かに生きながら、低環境負担型の社会にするという理念が、【II】の文章中でどう現実化しているかを具体的に説明するのですから、うまく例を列举してまとめていけばよいでしょう。

二　井上ひさしの、広島の原爆を扱った「朗読劇」です。物語ではあるのですがその表記は特徴的で、詩のようにも感じられる形態でしよう。6000字近い長文で、内容は、①被爆前、②被爆の瞬間と直後、③戦後、と三つの部分に分けられます。題名（少年口伝隊一九四五）からも分かる通り、作品の中心は③で、設問も③の部分が中心となつています。

問 2

被爆直前の四つの表現がどんな「効果」を上げて いるかを問う設問で、よく考えて答えます。四ヶ所の共通点は、家族とのんびりした会話であることです。それぞれの家族が仲良く暮らす、被爆前の平和で穏やかな日常生活の一コマをまずは丁寧に描写し、その後で、文字通り地獄のような修羅場（主人公の三人の少年の会話相手である家族は全員無残に死んでしまいます）を示すことによって、悲惨な状況がより強調され、印象づけられます。また、「ひとつ、ふたつ、みつつ」「よつ、いつつ」「九十九、百」というように数が数えられていく、その後、原爆が落ちて「世界が停つた」のです。つまり、この数字には世界の破滅に向かってのカウントダウンの意味もこめられているのでしょう。被爆へ向けての緊張感を高める効果があります。

問 3

被爆によって、「漢字の広島」が「カタカナのヒロシマ」に変わったとはどういうことかと問うもの。漢字は表意文字であることから、人々の様々な生活を包みこんで存在していた「広島」という都市が、何もかもが破壊されち身のなくなつた、空虚かつ無機質な「ヒロシマ」と変化したというような解釈もあるかもしれません。それでもここはやはり常識的に、「ノーモア・ヒロシマ」というときの「世界のヒロシマ」への変化だと見るべきでしょう。

日本の一地方都市にすぎなかつた広島が、世界史の中に大きく位置づけられ、アウシュビツと並び、人類の汚点を象徴する「ヒロシマ」として広く世界に知られるようになったのです。

問 5

1 三人の少年のうつたえを問う設問ですので、その直前にいくつか書いてある三人の少年のせりふの要点をうまくまとめればよいでしょう。戦争中は敵だったので「殺せ、殺せ」と言っていたのに、日本が負けて戦争が終わつた途端、敵であったそのアメリカ軍のご機嫌取りをなぜしなければならないのかという、戦争を経験した人々にとつては素朴で切実な疑問です。

2 じいさんが三人の少年に、「どんな思いで、どんなことを伝えようと思った」か、と問うて いますが、傍線部のじいさんの言葉の方言（例えば「ふとか」）に戸惑つた受験生もいたようです。また、じいさんの言葉は分かりにくいでなく、内容がそんなに豊富とは言えませんから、二百字以内で書くには相当ふくらませて（つまり、自分なりに考えを展開して）書かなければいけません。心情としては少年たちの疑問や不満を慰めようと/orものとしてとらえてよいでしょう。声が大きくなる者になびいたり踊らされたりするのは人間の本性だとしながらも、「難儀なことよのう」という最後の言葉からは、そういう現実を仕方ないとあきらめさせようと/orのなのかな、それともよくなことは改善していくべきだとするものなのか、という点についてはつきりと読み取りにくいのですが、中学入試問題という性格から考えると、前向きに生きていくとするメッセージとしてとらえておきたいところです。